

●二人で味わう古典和歌(47)

いまはただ思ひ絶えなむとばかりを人づてならでいふよしもがな

藤原道雅

『後拾遺和歌集』「恋」、また小倉百人一首の一首。

「今はただ、あなたのことはあきらめますと、せめてそれだけの人づてでなく言うすがあつたらなあ」。

前齋宮・当子内親王との悲恋を背景にした連作四首中の一首。当子内親王は、父・三条天皇が讓位したことにより、齋宮を退き京へ戻った。齋宮は伊勢神宮に奉仕する未婚の皇女で、御代代わりとともに交替する。

その内親王との恋が公になり、警護厳重ゆえに会えなくなったという。在原業平の場合とちがってもう齋宮を退いた方なのだから大した問題ではないんじゃないの、などの当時の世評も聞こえてくるが(『栄花物語』)、娘の将来を夢見ていた父院は激怒、たいへんな騒ぎとなったらしい。内親王は、恋に悩み人の噂に苦しんで出家し、そののち二十三歳の若さで亡くなったというから、傷ましい。



この道雅という人、じつは内大臣・伊周これちかの息子であるが、父の失脚や道長の隆盛により、從三位にとどまる不遇の人生を送った。そのためか奇矯過激な言動多く、「荒三位」「悪三位」とも呼ばれ、真偽の怪しいものまで含めて凄まじい荒廃ぶりが伝えられている。

しかし、冒頭の歌は胸を打つ。切迫した息づかいの上句から深い嘆息の下句へ、屈折し転換する韻律がすばらしい。決してただの荒くれ者ではない。それどころか、この歌の美しい力と荒くれぶりとは、根はひとつなのではないかとさえ思われる。『袋草紙』(藤原清輔)には、悲恋にまつわるこれらの歌以外、道雅には秀歌はないと評されているが、次の一首もまた、わたしには忘れ難い。

もろともに山めぐりするしぐれかなふるにかひなき身
とは知らずや 『詞花和歌集』

ともに山めぐりをするには、自分は甲斐のない身だよと時雨に呼びかけている。同じく不遇の藤原兼綱との連歌とも言われるが(『俊頼髓脳』)、それにしても、なんと深くやさしい語りかけだろうか。

(小島ゆかり)